平成25年度

日中キリスト教の比較から見る
文化の違い

研究指導教員名　Rodger S. Williamson

社会システム研究科 文化言語専攻

学籍番号　2012M43002

陳　丹

論文要旨

陳　丹

私は修士課程においては主に文化について研究している。文化は何によって成り立っているかと問われると、伝統、歴史、地理、宗教などの要素が挙げられるであろう。この中で、私は最も関心を持ったのは宗教である。特に長い歴史を持ち、世界諸国に大きな影響を及ぼしたキリスト教に対して興味を持つようになった。そこで、日本と中国のキリスト教を比較することによって、両国の文化の相違がきっと見出されるであろうと思い、「キリスト教の比較から見る文化の違い」を中心に研究することにした。また、相互の文化の違いを研究し、理解することによって、日中友好に小さな貢献でもできればと思い、本研究を進めようとした。

第一章においては、キリスト教と文化をより客観的に研究するため、両国におけるキリスト教の発展の歴史を研究した。キリスト教は日中両国において宣教師によって伝われたものであるため、まず、宣教においての両国の歴史とキリスト教への受容に着目点に置いた。そこで、歴史の中でのキリスト教が両国に受け入れられず、何度も排除されたことが分かった。長い間にキリスト教のことを受け入れられなかったのは、外国による侵略戦争が一番大きい原因だと言える。故に歴史上では、キリスト教の信仰が両国の土地で復興したり、また迫害されたりすることの繰り返しであったことが分かった。

次に、戦争が終わった後の発展として、中国においては中華人民共和国が成立し、中国の独自の教会と言える「三自愛国教会」が新しく設立されたことが分かった。戦後の中国は、戦争の迫害を乗り越えたが、しかし戦争によっての傷跡が残り、また現代にある経済的な貧しい状況に直面するため、心が飢え渇き、唯一の神へ信仰を更に求めるようになった。一方、日本では１８８９年、天皇の国家体制を中心とする「大日本帝国憲法」が成立し、日本人は天皇支配の下の存在となり、また中国と同様に、戦後の日本は貧しく、社会的な縛りも感じ、そこで本当の神の存在を求める人が増えたということが分かった。しかし、この時期での過剰な宗教運動がキリスト教の人口の増加を妨害する要因の一つとなった。

第二章においては、まず日本と中国のクリスチャンを対象にアンケートを取る形で、それぞれ実践的に信仰のあり方を分析し、それによって両国の文化の違いを明らかにする。次に、古屋安雄の著書に従い、「日本の宣教は１４０年を越えるというのに、なぜキリスト者は全人口の１％を超えないのか」という問題に対する、隅谷三喜男と古屋安雄との会話に沿って、三つの論争の結果を見出した。

第一に、「日曜信者」と呼ぶ日本人キリスト者が多く存在することである。日曜信者

とは、日曜日だけに教会に行き、礼拝をすれば、それで良いと思われる人である。そこで分かったことは、まず、日本人は社会で生きる時に、独特の信仰や宗教の本質を求めるよりは、皆で維持している日本社会の「和」を保つことに常に心掛けていることが分かった。次に、政治や社会への絶対的な服従に関しては、日本人は中国人より優れている。それは両国の文化にある意識構造の違いと関係することが分かった。日本人の意識には「自我」なく、常に「自己」意識をすることが多い。更に、日本人の「自己」は天皇や家長、社会などに投影されているため、中国人のように、持っている「思い」や「信仰」の主張をしなくなったことが分かった。

第二に、日本の文化の背後にある伝統が強く働いていることが分かった。その文化とは、「美」を意識する文化である。それはキリスト教の唯一神と少し衝突するように感じた。特に宗教的、信仰的立場においては、他の神も美しい（超越な価値）という視点は日本人の中に常に存在している、キリスト教に対して、「美は神なり」という言葉を持って、「神」を「美」の付属品にしてしまったと言っても、過言ではないということがと思わされた。

第三に、キリスト教の復興は「伝道」と深く関係することが分かった。伝道すればするほど、キリストの福音を多くの人に伝え、信者が増え、そうでなければ、その逆である。日本においては、逆の立場に立っている。それは、日本の「聞く文化」のゆえであることが分かった。それに対し、中国においては、「話す文化」を持つ故に、多く伝道し、キリスト教が今の復興があったということが推測されている。

第三章においては、信徒と教会の現状、また、日中キリスト教の課題を研究し、見出すことによって、結論として今後の方針を提案した。

第一に、日中において、信仰による共同の絆を共に作っていくことである。信仰に立つ故にしかできない文化の理解と相互の信頼をつくることを勧めている。

第二に、両国に対して、消極的な感情を認め、積極的な感情を見出すことを勧めている。消極的な感情としては、個人や社会の底に存在する問題と課題である。それを認めることさえできなければ、積極的な感情を見出すことができないということが分かった。

第三に、良きリーダーを求めることである。つまり、教会も変えられるべき存在である。そのために、牧会者（牧師）を訓練し、育ち、外から来られた信徒の心に応じての教会形成が必要とされていることが分かった。

結論としては、歴史と文化が両国のキリスト教の発展に影響を及ぼしている一方、キリスト教人口が増加することによってこれからの両国の歴史と文化を変えることができると考え、さらに、両国の関係が共通の信仰によって、もっと深くなることを予測する。